様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ１２３０４

研究課題名（和文）子ども虐待防止へのオープンダイアローグの有効性を測る

研究課題名（英文）Effectiveness of open dialogue on child protection

研究代表者
門間　晶子（Kadoma, Akiko）

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：２０２２４５６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、子ども虐待予防や子育て支援における新たな支援方法を提案するために行われた。まず、保健師や児童福祉司などの子ども虐待予防・子育て支援に携わる専門職者へのインタビュー調査から、支援における対話的な関わりの工夫を明らかにした。次に、児童相談所の児童福祉司などを対象にオープンダイアローグの研修を行い、参加者からのフィードバックを受けて、子ども虐待防止や子育て支援にオープンダイアローグを取り入れることの効果と課題を明らかにし、そのための研修方法の示唆を得た。また、文献検討によって、ダイアローグの研究と実践の動向、成果、課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
オープンダイアローグは、対話そのものが問題の解消につながるとする臨床的アプローチであり、個人の病理よりも取り巻く関係性（ネットワーク）に焦点を当てる。看護学分野への応用として学術的意義を持つ。オープンダイアローグが、虐待予防、および子育て支援の一環として十分活用可能であることを本研究は示した。その社会的意義は、子どもの安全確保と親への支援という粘り強い関わりが求められる領域において、オープンダイアローグが協働的支援として有効であることを明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：In Japan, the child abuse rate is increasing every year. Child parenting support and abuse protection have been essential agenda items for child health and family care. The purpose of this study was to reveal the effectiveness of the open dialogue approach in supporting parents with various challenges and needs. This study was approved by our institutional research ethics committee.
First, through semi-structured interviews, we explored the ingenuity of public health nurses in dialogic interactions with parenting families. Second, we clarified the effectiveness and challenges of using an open dialogue approach in child protection through the feedback of child protection staff who participated in our training sessions. Lastly, literature reviews suggested trends, achievements, and challenges of practice and research on open dialogue.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：子ども虐待予防　子育て支援　オープンダイアローグ　対話的な関わり

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

子ども虐待という深刻な、家族の危機的な場面において子どもの命を守るためにどのような対応・支援が可能なのだろうか。児童相談所(以下、児相)による虐待対応件数は毎年増加し、子どもが死亡に至るリスクを低減するために国は、「家族や養育者との協力関係を構築し、支援における『強み』として活かすこと」「対応に苦慮するケースであっても、粘り強く支援を継続すること」を提案している(厚労省、2015)。母子保健の主要な取組を示す「健やか親子 21」においても、現在の最重要課題として「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」があげられている。寄り添いは、教育・指導的介入ではなく、水平で協働的（コラボレイティヴ）な支援者側の態度および当事者と支援者の関係によって可能となると考える。虐待の危機から親子を守るために、当事者である家族と支援者双方の協働的な取り組みを提案するための研究が求められている。

これまでの研究において、ひとり親など困難を抱えやすい母親は、周囲との人間関係や子育てにおける生きづらさを語り、「育てにくい」という気持ちに対して保健師や児相職員から、もっと耳を傾けてほしかったと訴えた [1)2)]。現実が言葉から構成されるとする社会構成主義を理論的基盤にもつ研究や個々人ではなくその関係性に光を当てる研究がなされるようになってきたが、当事者と研究者との相互作用を通してその周囲の人の関係性を捉える試みはあっても、当事者にとっての重要他者（夫や親など）を直接対話の中に招き入れる研究的試みはまだ少ない。

本研究では子ども虐待予防や子育て支援における家族と支援者の対話のあり方に、北欧で生まれ精神科の急性期治療に効果を上げてきたオープンダイアローグ（以下、OD）の考え方を取り入れる。OD は患者や家族からの相談に対して 24 時間以内に患者や家族、支援者たちが集まり、診断ではなく対話の場をもつ。基本原則は開かれた(オープンな)対話をすることであり、秘密がなく平等な立場で話し合う [3)4)]。その方法は、患者や家族を、問題を抱えた存在として対象化し、診察室を中心として行われてきた家族療法の手法的限界を乗り越えるために開発された。

２．研究の目的

本研究では、子どもへの虐待の回避や防止のアプローチに焦点を当て、保健師等専門職者の工夫や努力および OD がもたらす効果について、インタビューや文献検討、OD 研修へのフィードバックを通して明らかにする。また、児童虐待の問題に関わる専門職者が OD を実践し得る効果的な方法や研修内容への示唆を得る。

３．研究の方法

(1)保健師等対人支援職者が実践している対話的な関わりに関するインタビュー調査
(2)保健師や児童福祉士などの「専門職研究協力者」を対象とした OD 研修実施と振り返り
(3)OD やダイアローグ・対話に関する実践や研究に関する文献の検討

４．研究成果

(1)子ども虐待予防・対応に関わる専門職者の「対話」実践に関する研究 [5)]

①目的

行政保健師が日頃の子育て支援活動の中で子育て中の家族と対話的に関わるためにどのような工夫をしているのかを明らかにし、支援の示唆を得ることを目的とした。

②方法

母子保健活動に携わる自治体保健師に半構成的インタビューを行った。逐語録から、子育て中

の家族に対話的に関わるための工夫について語られた内容を、類似性に基づいて分類し検討した。研究協力者には、参加における自由意思やプライバシー保護について説明し同意を得た。本研究は研究者の所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

③結果

子育て中の家族と対話的に関わるための工夫として保健師は、【いざというときに活きる普段からの援助的関係づくり】【関心をもち、身近で信用しうる存在であることを家族全体に受け入れてもらう】【安心して語ってもらえるような体勢をとり、気持ちに応答する】という工夫をしていた。また、【保健師の働きかけ方の特徴を自覚して支援者としての技術を磨く】、【家族の状況を理解し関わるための支援の質を保証する組織的な体制づくり】があった。

④考察

家族と対話的に関わるために保健師は、支援者側の心配や懸念を表現する関係性、家族員個人を守りながらも互いが気持ちを語れる場を模索していた。家族を支援する場面において複数の支援者、家族メンバー、家族の関係者が支援のネットワークとして関わること、ひとりや多様な声を丁寧に扱う対話やそのための研修の必要性が示唆された。

(2)子ども虐待予防場面での OD の効果・OD 実践の効果的な方法やトレーニングの提案[6)7)]

①目的

児相の児童福祉司などを対象に実施した OD 研修における参加者からのフィードバックから、子ども虐待防止場面に OD を取り入れることの効果と課題を検討することを目的とした。

②方法（児童相談所における OD 研修会の概要）と参加者の反応

児相との協働により家族支援のための OD の研修会を 6 回行った。研修会の概要は表 1 に示す。OD の講義と小グループでのリフレクティング体験、当事者家族の立場に身を置く体験、ファシリテーター体験、児相職員のみで OD 全体の演習、と段階的に OD の理解・体験を目指した。研修内容は事前に児相側の要望をよく聞いたうえで計画し、振り返りや質疑応答の時間を十分にとり、理解が深まるような研修内容とした。アンケートによって参加者の OD への「理解度」と「活用の期待度」を捉えた。本研究は研究者の所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

表 1　児童相談所における職員研修会の概要

		開催時期	内容	参加人数
基礎編	第 1 回	2017 年 2 月	講義・リフレクティング体験	16 人
	第 2 回	2017 年 7 月	困りごとの当事者・家族になる体験	20 人
	第 3 回	2018 年 1 月	ファシリテーター体験	31 人
実践編	第 4 回	2018 年 8 月	リフレクティング演習	9 人
	第 5 回	2018 年 10 月	オープンダイアローグ全体の演習	18 人
	第 6 回	2019 年 3 月	ロールプレイで実践をイメージ	10 人

③結果

研修会の参加者は延べ 104 人であった。アンケートによって捉えた「理解度」と「活用の期待度」はいずれも回を追うごとに増した一方、演習内容が実践的になるほど難しさを感じていた。自由記載からは、OD の基本原則の一つである不確実性に耐えること・多声性（ポリフォニー）の重要性の認識、リフレクティングを活用したアプローチへの理解があげられた。ファシリテートやリフレクティングの難しさや OD 導入のための人員確保の困難感などを訴える意見があった。

④考察

OD 実践の課題は、精神医療における導入と同様、マンパワーの確保や経済的なコストである。海外においても、OD の精神保健の専門家チームの早期介入には多額の投資が必要となるため、その費用対効果を疑問視する報告がある[8)9)]。関心はあっても、限られたマンパワーという児相の体制において、危機的状況にタイムリーに専門職らが集まり支援することは困難であるとの意見が多かった。OD は、統合失調症をはじめとする精神疾患の治療を中心に実施されてきたが、国内外において児童虐待を対象とした取り組みは未だみられず、参考にできる事例がない。

危機的な状況における OD のアプローチを家族支援のなかで普及させるためには、試行的に、家族が同席する既存の面談や会議の場で実施する、危機的状況でない比較的安定している事例から導入してみる、という方法が考えられる。また、対話を重視したアプローチといった点からは、OD に続いて日本に紹介されたアンティシペ―ションダイアローグ（未来語りのダイアローグ、以下 AD）や支援者の気がかりを起点として家族と関わる早期ダイアローグ(以下、ED)など[10)]も有用な支援方法となり得る。

この児相における研修のほか、対人援助職者らを対象とした OD 研修会を所属学会の学術集会や大学主催のセミナーなどで開催し、関心を同じくし、情報交換が可能なネットワークを構築するとともに、研修方法の示唆につなげた。次段階の研究では、子育て支援・子ども虐待予防の実践場面での家族支援オープンダイアローグを試行する。

(3)対話・ダイアローグの文献検討[11-13)]

①目的

ダイアローグに関する研究および実践の変遷を捉え、その成果や課題を検討することを目的とした。

②方法

医学中央雑誌 web 版を用い、「ダイアローグ」「OD」「AD」「ED」をキーワードとした文献と、対人支援領域である「看護」「医療」「福祉」「心理」をキーワードとした文献を組み合わせ、検索した。抽出した文献から研究論文および解説を検索して文献を特定した。

③結果

ダイアローグの研究に関する論文は、2016 年から報告され始め、精神科領域に関する事例検討が中心であり、医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士などの専門職者・研究者から報告されていた。内容は、OD 実践の成果と院内体制の課題に関するもの、AD の効果と有用性に関するもの、当事者の自殺念慮を患う経験と自殺予防アプローチとして妥当な枠組みを検討したもの、OD におけるリフレクティングの発達障害者への効果、OD を用いたアプローチによる患者や支援者に起こる心理的変化や関係性の変化から OD 実践における今後の課題に着目した報告であった。見出された OD の成果として、当事者の経験への理解や参加者間の温かな雰囲気が生まれ、互いに変化するとともに、自己決定が尊重される支援に結びついたこと等が示唆された。OD 実践の課題として、OD の成果を生かすための院内体制整備、マンパワー不足を補うシステムの構築、治療結果への医療者の不安や懐疑的な感情、ダイアローグがより肯定的なアイデンティティや存在意味をもたらすかは明らかにできなかったこと等があげられた。

ダイアローグの実践に関する解説はその内容から精神科医療、精神科看護、心理・カウンセリング、地域・学校保健の領域に分類できた。精神科医療では、統合失調症や家庭内暴力などの患者と家族との対話、包括型地域生活支援プログラム（ACT）や院内の地域支援関係者間カンファレンスでの実践等、精神科看護では、リフレクティングを用いたケースカンファレンス、障害者

生活支援職員へのAD実践、「経験としての病い」を「患者カルテ」として記す等であった。心理・カウンセリングでは、スクールソーシャルワークでの個別相談やケース会議・福祉の研修での実践、ひきこもり事例への適用、発達障害者の職場定着支援での実践、グループスーパービジョンへの応用等であった。地域・学校保健では、精神保健福祉センターの訪問支援、市民の健康に関する困りごと（worry）緩和の実践、子育てを巡る母親たちの語りあい、健康無関心層への実践等であった。

④考察；ダイアローグの実践における成果と課題

各論文に記載されている成果と課題を類似性に基づいて分類、統合、命名した。実践における成果では、当事者、支援者、支援のネットワーク、臨床・地域のフィールドに関することがあげられた。実践への課題では、支援者、組織体制づくり、臨床・地域・研究のフィールド、事例への効果に関することがあげられた。

引用文献

1)門間晶子：虐待から抜け出す物語－母親と研究者の「協働するナラティヴ」－，家族看護学研究，20(2)，79-92，2015

2)門間晶子：子どもが一時保護となった母親の経験－子育てを助ける対話への示唆－，日本地域看護学会誌，23(3)，4-12，2020

3) Olson M, Seikkula J, Ziedonis D: The key elements of dialogic practice in Open Dialogue. The University of Massachusetts Medical School, Worcester MA.2014.

4)齋藤環：オープンダイアローグとは何か．医学書院，2015.

5)中畑ひとみ・加藤まり・門間晶子：行政保健師が子育て中の家族と対話するための工夫，日本家族看護学会第27回学術集会抄録集，44，2020

6) 門間晶子，野村直樹，浅野みどり，山本真実，細川陸也，佐藤博文，白木孝二：オープンダイアローグ研究における私たちの試行―子ども虐待予防へのアプローチ―，看護研究，51(2)：147-154．2018.

7)細川陸也・門間晶子・野村直樹・浅野みどり・山本真実・佐藤博文・白木孝二：虐待防止への家族支援オープンダイアローグの試行　児童相談所における職員研修の取り組み，保健師ジャーナル，76(10)，854-861，2020

8) Freeman AM, Tribe RH, Stott JCH, Pilling S: Open dialogue: a review of the evidence. Psychiatric Services, 70(1): 46–59. 2018.

9) Lakeman R: The Finnish open dialogue approach to crisis intervention in psychosis: a review. Psychotherapy in Australia, 20(3): 27-33. 2014.

10) 白木孝二：未来語りのダイアローグ－もう一つの基本プロセス－，精神科治療学，33(3)：33-39，2018.

11)門間晶子：子育て支援・子ども虐待予防における対話に関する研究の動向（文献検討），第76回日本公衆衛生学会総会，鹿児島市，2017

12)門間晶子，山本真実，浅野みどり，野村直樹：「オープンダイアローグ」に関する文献検討，第37回日本看護科学学会学術集会，仙台市，2017

13)加藤まり・中畑ひとみ・門間晶子：対人支援領域における「ダイアローグ(対話)」の研究と実践に関する国内文献レビュー，日本家族看護学会第27回学術集会抄録集，51，2020

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 門間 晶子	４．巻 23
２．論文標題 子どもが一時保護となった母親の経験	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本地域看護学会誌	６．最初と最後の頁 4～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20746/jachn.23.3_4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 細川陸也・門間晶子・野村直樹・浅野みどり・山本真実・佐藤博文・白木孝二	４．巻 76
２．論文標題 虐待防止への家族支援オープンダイアローグの試行　児童相談所における職員研修の取り組み	５．発行年 2020年
３．雑誌名 保健師ジャーナル	６．最初と最後の頁 854-861
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加藤 まり、門間 晶子、山口 知香枝	４．巻 43
２．論文標題 知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害（ASD）がある母親の子育て	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本看護研究学会雑誌	６．最初と最後の頁 2_163～2_175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15065/jjsnr.20191125077	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野村直樹	４．巻 17(2)
２．論文標題 共創の時狭間 ―素の時間、二人称の時間、E系列の時間―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 こころと文化	６．最初と最後の頁 142-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Naoki Nomura, Tomoaki Muranaka, Jun Tomita, Koichiro Matsuno.	4．巻 11
2．論文標題 Time from Semiosis: E-series Time for Living Systems	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Biosemiotics	6．最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12304-018-9316-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 門間晶子・野村直樹・浅野みどり・山本真実・細川陸也・佐藤博文・白木孝二	4．巻 51(2)
2．論文標題 オープンダイアローグ研究における私たちの試行－子ども虐待予防へのアプローチ,	5．発行年 2018年
3．雑誌名 看護研究	6．最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nomura Naoki、Muranaka Tomoaki、Tomita Jun、Matsuno Koichiro	4．巻 09-April
2．論文標題 Time from Semiosis: E-series Time for Living Systems	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Biosemiotics	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12304-018-9316-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野村直樹	4．巻 33(3)
2．論文標題 「無知の姿勢」と「二人称の時間」－臨床における対話とは何か－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 精神科治療学	6．最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野村直樹	４．巻 33(2)
２．論文標題 ダブルバインド理論がもたらしたもの	５．発行年 2018年
３．雑誌名 精神科治療学	６．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 門間晶子・山本真実・細川陸也・富塚美和	４．巻 20(3)
２．論文標題 乳幼児を育てる母親がとらえた「しつけ」と「虐待」－対話的アプローチによる検討－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本地域看護学会誌	６．最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野村直樹	４．巻 43(3)
２．論文標題 オープンダイアローグを「知の形式」として ―ベイトソンの系譜から―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 精神療法	６．最初と最後の頁 326-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 門間晶子	４．巻 第8号
２．論文標題 しつけか虐待か－協働するナラティヴあるいはオープンダイアローグの可能性とは	５．発行年 2017年
３．雑誌名 N：ナラティヴとケア	６．最初と最後の頁 72-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野村直樹	４．巻 第8号
２．論文標題 はじめに－「開かれた対話」の世界へようこそ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 N：ナラティヴとケア	６．最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 中畑ひとみ・加藤まり・門間晶子
２．発表標題 行政保健師が子育て中の家族と対話するための工夫
３．学会等名 日本家族看護学会第27回学術集会抄録集
４．発表年 2020年

１．発表者名 加藤まり・中畑ひとみ・門間晶子
２．発表標題 対人支援領域における「ダイアローグ(対話)」の研究と実践に関する国内文献レビュー
３．学会等名 日本家族看護学会第27回学術集会抄録集
４．発表年 2020年

１．発表者名 門間晶子・野村直樹
２．発表標題 児童虐待における一時保護をめぐるポリフォニー～母親の語りに現れる主人公たち～
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akiko KADOMA, Mami YAMAMOTO, Midori ASNO
２．発表標題 The Potential of Open Dialogue in Child Abuse Prevention in Japan : A Case Study of a Mother Who Lost Temporary Custody of Her Child
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mami Yamamoto, Akiko Kadoma, Midori Asano
２．発表標題 Suggesting Future Themes about the Role of Conversation in Child Rearing Support in Japan by Literatures Review
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 中畑ひとみ，門間晶子，尾崎伊都子
２．発表標題 若年性認知症がある人々が社会参加することの意味：当事者および支援者の視点
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 浅野みどり，小野 里衣，門間 晶子，山本 真実，山口 知香枝
２．発表標題 「家族の価値カード」セッションの様々な対象家族への活用可能性の検討
３．学会等名 日本家族看護学会第25回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 門間晶子・浅野みどり・山本真実・野村直樹・佐藤博文・細川陸也・近藤宮子・広瀬奈々子・白木孝二
２．発表標題 児童相談所と大学の協働による家族支援オープンダイアローグへの取り組み
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第24回学術集会おかやま大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 門間晶子・浅野みどり・山本真実・細川陸也・富塚美和・加藤まり・中畑ひとみ・野村直樹
２．発表標題 看護における対話の可能性～オープンダイアローグの紹介・体験～
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 門間晶子
２．発表標題 子育て支援・子ども虐待予防における対話に関する研究の動向（文献検討）
３．学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 門間晶子，山本真実，浅野みどり，野村直樹
２．発表標題 「オープンダイアローグ」に関する文献検討
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浅野　みどり (Asano Midori) (30257604)	名古屋大学・大学院医学系研究科（保健）・教授 (13901)	
研究分担者	細川　陸也 (Hosokawa Rikuya) (70735464)	京都大学・大学院医学研究科・講師 (14301)	
研究分担者	野村　直樹 (Nomura Naoki) (80264745)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	
研究分担者	山本　真実 (Yamamoto Mami) (90710335)	浜松医科大学・医学部看護学科・准教授 (23702)	
研究分担者	佐藤　博文 (Sato Hirofumi) (60813178)	名古屋市立大学・大学院医学研究科・臨床研究医 (23903)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	白木　孝二 (Shiraki Koji)		Nagoya Connect & Share

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	加藤　まり (Kato Mari)		名古屋市立大学大学院看護学研究科博士後期課程
研究協力者	中畑　ひとみ (Nakahata Hitomi)		名古屋市立大学大学院看護学研究科博士後期課程 藤田医科大学

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関